

新刊紹介

三浦 展著

『下流社会 新たな階層集団の出現』

難波江和英

ここ数年間（特にこの1～2年）に出版された本のタイトルには、あるひとつの言葉がまるで亡靈のように浮遊している。

たとえば、刈谷剛彦の『階層化日本と教育危機—不平等再生産から意欲格差社会（インセンティブ・ディバイド）へ』（有信堂高文社）、佐藤俊樹の『00年代の格差ゲーム』（中央公論新社）、村上龍の『恋愛の格差』（幻冬舎）、山田昌弘の『希望格差社会—「負け組」の絶望感が日本を引き裂く』（筑摩書房）、白波瀬佐和子の『少子高齢社会のみえない格差—ジェンダー・世代・階層のゆくえ』（東京大学出版会）、林信吾の『しのびよるネオ階級社会—“イギリス化”する日本の格差』（平凡社新書）、暉峻淑子の「格差社会をこえて」（岩波ブックレット）。

そう、「格差」という亡靈。その亡靈は、こういう物語（シナリオ）のかたちを取って、わたしたちの前に「現実」としてあらわれる。「所得格差が広がり、そのために学力格差が広がり、結果、階層格差が固定し、流動性を失っている。」ありふれた表現を借りれば、「いまの日本社会では、階層が階級化している。」

本書の著者（マーケティング・アナリスト）は、この物語を「日本が今までの『中流社会』から『下流社会』に向かうということ」と読み替えて、団塊ジュニア世代の消費行動を軸にした各種のデータによってその現実性に輪郭を与え

『下流社会 新たな階層集団の出現』

ていく。本書のキャッチ・コピーには、「階層問題における初の消費社会論」とある（ただし、小沢雅子の『新・階層消費の時代—所得格差の拡大とその影響』という本が、すでに1985年に出版されている）。

それにしても……「下流社会」。まさに旬のタイトリングである。この「下流」とは、食うものにも事欠く「下層」ではなく、生活水準では「中の下」あたりのことらしい（これの対極のように見える「上流」もまた、生粋の「上層」ではなく、「中の上」くらいの意味である）。それでは、「下流」とはなにかと言えば、それは「単に所得が低い」ということではなく、「コミュニケーション能力、生活能力、働く意欲、学ぶ意欲、消費意欲、つまり総じて人生への意欲が低い」ということである。もっとわかりやすく言えば、「好きなことだけ」をして「その日その日を気楽に生きたい」と願いながら、そして「自分らしく生きるのがよい」と思いながら、実は「面倒くさがり」で「だらしない」ので、青い鳥のとりこになったまま、結局は生活満足度を上昇させられない人間—それが「下流」のイメージである。

思えば、戦後の日本社会は、食うや食わずの「下層」が「総中流化」していくという物語を支えにして発展を遂げた。しかしいまや、その「中流」が「下流化」して、階層全体が少数の「上」と大多数の「下」に二極分化しつつあるという。ここで特に注目したいのは、その階層化が進むにつれて、人々のライフスタイルにジェンダーによる「格差」が生まれてくるという点である。しかも著者の仮説では、問題となる「格差」は、男女間に生まれるのではなく、男女それぞれの内部に生まれる。言い換えれば、男女が「格差」を競う相手は、異性ではなく、同性同士ということになる。

たとえば、「女性の分裂」は、「お嫁系」（「ゆとりのある暮らし」志向）、「ミリオネーヌ系」（高学歴＝高職歴＝高所得）、「かまやつ女系」（「手に職」志向）、「ギャル系」（「早婚・専業主婦・子持ち志向」、「人生に対する計画性・将来予測能力」の不足）、「普通のOL系」（「専業主婦志向」、「自分さがしと瘾」と「自己表現」志向）、それに対して「男性の分裂」は、「ヤングエグゼクティブ

『下流社会 新たな階層集団の出現』

系」（「高所得志向・出世志向」）、「ロハス系」（「スローライフ志向」）、「SPA!系」（「『中』から『下』にかけてのホワイトカラー系」）、「フリーター系」に分類されている。

しかしそれにしても、こうしたライフスタイルのパターン化を「現実」として固定させる「格差」という亡靈を放し飼いにしたのは、いったいだれだろう。そしてまた、そのことによって得をするのは、いったいだれだろう（「階層格差」という欲望を商品化するマーケット？ そう言えば、「セレブ」をめざす女性たちのために企画された、「一流」の男性たちとの見合いパーティのことが、新聞の記事になっていた）。いずれにしても、なんとも気味の悪い「現実」である。

著者は最後の章で、日本社会の「下流化」に歯止めをかける措置として、所得の低い人間こそを優遇する「機会悪平等」を提案している。たしかに著者が言うとおり、「完全なる機会均等社会が実現したら、結果の差はすべて純粹に個人的な能力に帰せられる」。それはそれで辛い社会である。しかしあなたには、こうした是正措置（アファーマティブ・アクション）を考える前に、もっとできことがあるように思われる。本書を読みながら、そのことがずっと気にかかっていた。

なるほど「格差」は、人間の存在にズレを設定して、人々を比較の競合にあり立てる。幼いころから「幼児教育」、少し大きくなれば「塾」や「習い事」、大学生になっても「資格」。これらはどれも、すでに「格差」という亡靈のなせるワザになっている。しかし、（当然のことながら）人生はそもそも勝負事ではない。わたしたちはいつから、無名の人として、地道に生きることの凄みを忘れたのだろう。本書が教えてくれたことは、そこに書かれていた内容というより、そこからふと浮かんだ、こうした逆説の重さにほかならない。

（光文社新書、2005年、284頁、本体価格780円+税）